
真恋姫＋夢想 桃園の誓い

紳士な兄と幼女性癖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真 恋姫†夢想 桃園の誓い

【Nコード】

N2848Q

【作者名】

紳士な兄と幼女性癖

【あらすじ】

まあタイトル通り蜀です。

だれも死ななければいいなー。

恋姫やりこんでないんでキャラの性格ぶれます！……ごめんなさい。

自分の最良なキャラが扱い酷くても文句言わないでね？おにいさん
との約束だぞ（笑）

オリジナルキャラは………どーしよっかな………未定で。

序章・出会い・

男が倒れていた。

この者、姓を北郷、名を一刀という。

生まれも育ちも多分東京。

聖フラなんちゃら学園の2年生……だった気がする。

そしてここは中国、三国志の時代。

何故こんなことになったのかは不明。

ただっ広い荒野に寝転がってる北郷。この北郷、ひとつ能力を持っている。相手の目をみて「かくかくしかじか」それで自分の言いたい事が相手に伝わる。なんともまあ作者に都合のいい能力か。

さておき、そこに2人の少女が歩いて来た。

もちろん北郷がハーレムを築く礎となる御仁達だ。

黒髪美少女 関 雲長

元氣印の 張 翼徳

2人は、北郷を見つけた……

序章・その男、異世界人につき・

「おい、大丈夫か？」

固いもの（関羽の武器の柄）で肩を揺すられる感覚で、北郷は久しぶりに目を開いた。

「ん……う……」

そして北郷は、目に見えた物を口に出した。

「え……し……ま……パn」この下郎があああ！……」

言い終わるよりさきに蹴り飛ばされてしまった。

ヒュ……ドサツ、ゴロゴロ……飛距離ざつと6m。

「流石にやり過ぎなのだ愛紗……」

隣にいた少女、張飛も呆れている。

「いや、そんなことはないぞ？ 鈴々。いきなり下着を覗いてくる輩にはこれでも足りないくらいだ」

うんうん。と自分で頷いた後、

「ほら、行くぞ鈴々。村までまだ距離がある。今日の寝床も暗くなるまえには探さない」と

と張飛を促したのだが……

「ねえ愛紗、あの人って前の町で予言された天の使い……天使ではないのか？」

その言葉に足を止める愛紗。

「なにを馬鹿な、こんな変態が……」

「でもあの人変なのだ」

「……いや、まあ変態だから変なのはあたり前……」

「そうじゃないのだー！あの人武器を何ももってないのだ」

「そういえば、そうだな。んゝ賊に盗られたとか」

「それならあの高そうな服も盗られているはずなのだ」

「たしかに」

「あとあと、こんな所で行き倒れるなんて頭おかしいのだ」

「ふむ、どこの方角に歩いても半日以内で町や村につけるからな」

「だから少し話をきいてみるのだ」

「ん……いたたたた」

北郷はしばらくして意識を取り戻した。

「大丈夫ですか？」

いきなり声をかけられたのでびっくりした北郷。

「んゝ大丈夫かなゝゝ」

そう答えると、手を差し出されたのでありがたく借りて立ち上がる北郷。

「早速ですがお伺いしたいことがあります」

「んゝ俺もいろいろ伺いたいことがあるんだけど……どうぞ？」

「私の名は関羽、字を雲長。こちらの者の名は張飛、字を翼徳と申します」

「んゝはい」

「私達は旅をしています。これから私達はなにをすればよいのでしょうか」

「時代の流れがわかんないからなあゝひとつ質問いい？黄巾党を倒しに行くの？」

「もちろんです」

「なら……そうだな、名を劉備字を玄德　という人に会いに行くのがいいかな」

「なっ……。もうひとつ質問を」

「どうぞ？」

「私達の得物の名前、わかりますかな？」

「得物って、武器？だったら関羽は青龍偃月刀 張飛は蛇矛かな」

「ふむ……。いい名前だ……」

関羽は呟き、喋りだす。

「立て続けに申し訳ない。ひとつ願いを聞いていただけないか」

「願い？」

「私達の標となってほしい」

「標……。ねえ……。その前に聞いて欲しい」

そして話しはじめた

一刀の今までを……

序章・その男、異世界人につき・（後書き）

異世界人につき変態です

かな。

一章・その女、武人につき・

夕焼けが歩いている3人を照らしていた。

「なるほど……」

関羽は唸り、黙った。

「んー、どういふことなのだ？おにーちゃん」

張飛はお手上げとばかりに聞いてくる。

関羽が確かめるように聞いてくる。

「つまり、いつか貴方の果たすべき仕事が出来たら、別れなければならない。そういうことで間違いないか、天使殿」

「そういうこと。ところで、その天使つてのやめてくれないかな」

「天の使いなので天使……ではいけないのでしょうか」

「いやーさ、俺の知ってる天使つてのは俺みたいな男がするもんじやないしさ」

白いレースの服を着ている北郷……なんともシニールな画である。

「それなら北郷殿で」

「これからよろしく。愛紗、鈴々」

「はい」

「よろしくなのだ」

「いまから向かう桃花村ってどんな所なんだ？」

「この時期は、桃の花がとても綺麗な村です。桃源郷、その言葉がとても似合うそんな場所です」

桃源郷。北郷はその言葉に少し胸をときめかせた。

「あとどれくらいでつくのだ？もう歩けないのだ」

「鈴々、すぐそこだ。そこの雑木林を抜ければ……」

関羽は立ち止まった。つられて北郷も止まる。

「来るのだ」

鈴々も武器を構えていた。

「ははははは、今日も大量だなあ」

「そうっすね〜アニキ。若い女も捕まえましたし」

そんな雑談をまじえながら黄色の服を着た男達がざっと500はで

てきた。

「あんなところに綺麗な女がいますぜアニキー」

アニキと呼ばれる男は、500の手下と村から奪ったであろう荷物と数人の若い娘をもつて関羽達の所へ来た。

「おい、長い髪のお前」

「私、か？」

少し俯きながら返す関羽。

「今晚俺らと一緒に酒でも飲まねえか」

「村から奪った食糧をつまみに、か？」

確かめるように聞く関羽に、黄巾党の輩はあざけわらうように答えた。

「村の食糧？だーれもそんなこと気にしねえって。そーだろ？者共！」

ほかの500人は各々に同意の声をあげている。……ひとつ、関羽の怒りをかい……

「村の娘は気にしているだろう」

「村の娘だあ？こいつらは俺らの戦利品だよ せんりひん」

ふたつ、関羽の怒りをかう……

「お主らはしかと強いと見受けられる。それゆえに、なぜ強奪を繰り返す……」

「力は正義だからだ。強い者は弱い者を虐げてもいいからな」

みつつ、関羽の怒りをかって……グッ、と関羽の拳が握られた。

「あーあ、愛紗がキレちゃったのだ……」

張飛は呆れるように呟いた。

「力は正義……か？ならば私も力づくで捕えてみせてはいかがだろう。私は多少、武に覚えがあつてな……」

そういつて青龍偃月刀を構える関羽。

「ああ、そうするよ、だが、こちらは600人で行かせてもらつよ！！」

「600人か……」

「悪く思ふなよ、数は力だからな！」

「鈴々と半分といきたかつた所だが、それでは私がおさまりきれないんでな、すまん。鈴々は北郷殿を」

そういつて愛紗は駆け出した……

一章・その女、武人につき・（後書き）

怒らすべからず

って感じで、どすか？

一章・その女、詳細不詳にて・

村が……燃え始めていた。

彼女は黄巾党が火を放ったのだと悟った。

起きるまで綺麗だった村の周りの桃の木達は、赤い火柱となっていた。一見すると無事な桃の木は村の真ん中の小高い丘の一つだけ。

だけど、私には所詮関係のない事。彼女は、そう思っただけで火が村に回る前に村から立ち去ろうとして、戟を手には歩きだした。

「てめーら、野良猫一匹たりとも逃がすなよ!!」

その声が聞こえて、自分は関係ない、と思っていたはずなのに、彼女は自分の声の方へ向かっていた。

「わりーな子犬ちゃん。お上の命令なんだから……」

黄巾党の兵が子犬にむかって刀を振り上げた瞬間、刀が手から落ち、膝について倒れた。

「大丈夫……?」

彼女は子犬を抱き抱えると呟いた。

「全員、間に合うかな……」

桃花村の小高い丘の上に一人、少女が刀を持って黄巾党と対峙していた。

「なあ嬢ちゃん、悪いようにはしねえからさー、こっちなよ」

「嫌です。この木には絶対に触れさせません」

「おうおう、いうねー嬢ちゃんも」

「嬢ちゃんではありません、玄德です」

「玄德ちゃんさー、戦ったことないんでしょ？そんな無理しなくてもさー」

「無理をしても守りたいんです」

「へえーじゃあ、やろつか俺と」

少女は返事もせず男にむかって刀を振り上げていた。

キーン、と鉄の当たる音と共に少女の持っていた刀が、宙をまい、少女の手が届かない遥か先に落ちた。少女はへたれこんでいた……

「ほーらな、所詮女なんてこんなもんだよ。まあお前はまけたんだ

し、死のつか？」

男は剣を少女に向けた。

その一瞬後には胸に戟が刺さっていた。

「間に合った？」

桃の木の横を歩いてくる犬を抱いた少女。

「あなたは？」

玄德と名乗った少女が歩いてくる少女に聞いた。

「後……」

それだけいい玄德に自分が抱いていた犬を渡した。そして男の胸に刺さった戟を抜き、黄巾党の残りの兵にむかつて言った。

「……虫けらは……散れ……」

「ひ、怯むなー、こちらら700人いるんだ!!」

「……来い」

そついつて睨んだ彼女のひとみには鬼の影が宿っていた。

「……くっ……」

「来ない……? なら行く」

駆け出した彼女に一步も動けない黄巾党兵。

一撃、虫を叩き潰す様に

一撃、命の灯を消す様に

一撃、己の武を示す様に

一撃、獣の行いの戒めとして

一撃、助けられなかった命の償いとして

攻めてきた黄巾党兵が全滅するのに時間という時間もかからなかった……

一章・その女、詳細不詳にて・（後書き）

詳細不詳につき詮索するべからず、ね

まあ大半の人にはばれてるけどねー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2848q/>

真恋姫＋夢想 桃園の誓い

2011年1月25日01時19分発行